

比較文化会報

May 1982 No.3

事務局 青森県弘前市椴町13-1
編集兼発行者 山浦拓造

弘前学院大学英米文学佐藤研究室
電話 (0172) 34-5211 内線 73

文学と映画 (言語文化と映像文化)

副会長 芳賀馨

文学と映画、つまり言語文化と映像文化はそれぞれ、独立した芸術領域である。したがって、それらの相互関係を論ずることは不可能であるとする考え方は、ある意味では、一応成立するといつてよい。しかしながら一方、例えば、ジョン・ドス・パソスの文学作品に内在する「カメラ・アイ」の手法や、テネシー・ウィリアムズの「ガラスの動物園」などに見られる映画的手法について論ずる場合、文学作品における映画的要素を考慮せずには論を展開することは不可能である。この種の問題は、その歴史的発生からみて全く異質の芸術領域と考えられていた文学と映画の間に、いつしか、ぬきさしならない相互関係が存在することに気付いた事象と同様の問題なのである。アーネスト・ヘミングウェイの、例の「ハード・ボイルド・スタイル」に、日本の浮世絵の影響が認められることなど、その典型的一例といえよう。

現代社会では、それぞれ独立した芸術領域を考へる場合にも相互関係を総合的に考察せざるを得ない点を「神話批評」では明確に指摘している。

さて、文学と映画の相互関係が論議され始めたのは、アメリカでは、一九三〇年代ハリウッド映画全盛の時期以降であ

る。当時この問題は、主として、優れた文学作品(小説)の映画化という点に集約された。その意味では、一九四五年、イギリスの評論家ハーパー・リードが、文学と映画に共通する特性を捕えてVISUALという一語に要約しているのは興味深い提言である。文学の特性を「言語」という手段によるイメージの伝達であると規定し、読者は「頭脳の内部のスクリーンにそのイメージを投射する」のだと説明し、一方理想的映画に関して、上述の文学的特性がそのまま適用しうる」と断じているのである。

二次大戦のあと、大学内に、映画部門(や演劇部門)が設置されて、再び文学と映画の論議が展開され、出版物も多様に発行されて隆盛を極めるに至る。この場合、映画論は映画製作にもおよぶ専門的問題をも含んでいるが、同時にこの問題は、社会的背景からみる場合、ジャーナリズムとアカデミズムの関係としても把握しうる。一読して捨て去るべきジャーナリズムが、伝統的学問の府としてのアカデミズムの世界に浸透していく過程と、一般大衆の娯楽にすぎなかった一過性の映画が、大学社会の一部門としての地位を獲得していく姿は相似しているのである。

テレビドラマの黄金時代といわれる一九五〇年代以降は、映画のみならず、テレビを含めた広義の映像芸術(文化)論として、文学作品のテレビドラマ化の問題やテレビ製作に至る広範な問題に発展し複雑に展開するのである。

テレビ放送のための「ミニ・シリーズ」は、同時に撮影した作品をテレビ放送用と劇場映画用と二種類の編集をして製品化し、すでに相捕の効果を生み出している。伝統的文芸作品の映画化のほかに、映画を売り込むためにペーパーバック版の小説を大量に廉価な形で放出し、これもまた相補的効用をもたらしているのである。市場では、言語文化と映像文化の共働的相乗作用が著しいのは日本でも同様である。

山田太一が、現代の投機的企業としての各種芸術領域のなかで、テレビドラマが最も安定して日常性を芸術化しうるメディアムであると主張するのは、適切な発言である。

一九八二年、大好評を博したテレビドラマ「北の国から」の原作シナリオの序文に、いまなお、脚本文学という独立した文学ジャンルが存在を力説する倉本聰がつぎの主張を述べているのは実に象徴的である。「シナリオは読みながらその情景や主人公の表情や悲しみや喜びを、みなさんの胸のスクリーンに描きやすいように書かれています」

(福島県立医科大学外国語講座教授)

二十年後の家庭の

食生活を考える

福島支部長 森 一

いつの時代でも、親や教師にとって気になることは、わが子や教え子が心身共に、健全に一人立ちできるかどうか、ということであろう。

二十年後は西暦二千年を越える。今年の出生児はその時には二十歳となり、今年成人式を迎える若人は四十歳である。小学生の、いや、時には中学生の親でもあり得る。その頃の社会（地球も）は果たしてどうなっているだろうか。百年の大計、という言葉は現代では夢想的にさえ響く。一方、来年のことを言えば鬼が笑うというのに、わが福島支部の例会は、二十年後の家庭の食生活環境を考える、というテーマで談話会を催した。

食生活はその名が表すように、食をとりまく家庭生活であり、人間形成に大きな関連をもつ家庭教育の問題でもあるが、現状はどうであろうか。インスタント食品の氾濫、青少年や児童の食品嗜好傾向の均一化、朝食抜きの生徒の増加、溢れんばかりの食品の中の肥満化や反健康者の増加、等々、あまりにも多くの問題が生まれつつある。

今後、食品産業による新製品の増加、家庭における食物の保存、貯蔵の形式変化、メーカーへの注文や、メーカーから

家庭への搬入方法の変化、精密な栄養分析表の添付、等々技術革新の変化と、それに対応する人間の姿勢、そしてこれらを前提とした教育のあり方、……といったことが話し合われた。

今回が初回であり、時間が短かかったにもかかわらず、考えさせられるいろいろの問題が指摘された。わが支部では、このつづきを含めて今後も度々、このような勉強の場を設けたいと考えている。

当日の会場に種々御便宜を賜った女子大の関口学長に感謝申しあげます。

当日、次の方々の御出席をいただきましてありがとうございます。敬称略
郡山女子大学（芳賀文子・佐原真・阿部富士子・山田幸二・広井勝）桜の聖母短大（佐々木信夫・森淑・斎藤英二・斎藤和子）福島医大（芳賀馨・南条善治・森一）
（医大・生物学教授）

キャロラインのこと

佐々木 信 夫

三週間のインドの旅行で、私は、ガールフレンドを得た。彼女は、十歳の少女で、名をキャロラインという。キャロラインの家は貧しい。祖母・父母・兄弟五人の八人暮らし。父は、交通事故に遭い片足がない。約六坪ぐらいの土間に生活。屋根は、木片やトタンを寄せ集めて

造ったバラック小屋。彼女は、垢のしみた衣服を着て、はだしで歩く。食物も充分でない。髪を赤いハンカチで、束ねているところが女の子らしい。

そのキャロラインに、不思議なことが一つある。それは、微笑が絶えないことだ。いつでも、誰にでも、こぼれるような笑みで応える。

喜びが、からだ全体に表出される。心が笑みとなって、顔に表現されるのだ。あの貧しい生活のどこに喜びがあるのか。いや、キャロラインだけではない。周りの子供たち、大人も、みんなそんなのだ。青年たちの満足そうな笑み、婦人たちの恥らしをもった笑み。インドの人たちは、「インドの心」をもっている。不思議に思う。このことを、楽天的な、底抜けに明るいインド人の民族性だと片づけてしまうことはできないように思う。

帰国して、電車の中の同胞は、異邦人のような、異様な感じがする。神経をピリピリさせた落ち着きのない紳士。気力のない小学生。眠むような疲れた母親。俯抜けとしかいいようのない青年。日本には、どうして笑みがないのだろうか。近代化によって、「日本の心」を失ってしまったのか。

インドで、豊かな日本人として、私がキャロラインにしてあげたことは、物を与えることだけだった。恵むことが苦痛でさえあった。しかし、私のできること

は、それしかなかった。私は、彼女の家族のために贈物をした。突然、彼女は泣いた。大粒の涙が、ほほをつたって流れた。嬉しさのあまり泣いたのだ。涙に濡れた瞳が、きよらに輝き、再びほほえんだ。

キャロラインは、日本に留学したいという。「父母も許してくれました。つれていってください」と英語でいう。キャロラインの胸には、美しい日本が無限にひろがる。そこには「日本の心」をもった日本人がいるに違いない。

（桜の聖母短大・教授）

或る経験と心境

東北女子大学
藤 原 廉 作

一九八一年夏約四週間に亘る総合学術研修並学位判定総合学会(CDFINMSR-DCLA-カルフォルニア大学特別総合学術研究推進会)における学術研修学会に参加して、極めて国内における各学会又は研修学会とは異なった特殊的印象を受けた点多く、又研究あるいは考究段階において受けた印象は数多く、現在も明瞭且つ明確に頭脳に刻みつけられ忘れ得ないものとしてハッキリ憶い起こされる。数々の中を全部挙げることは不可能であるが、その中特に戦慄に残存しているも

のを或る経験として与えられた。これについて記憶に残しておきたい意欲が今わいているのである。

小生の発表並論説内容としては「経済史の古代発展段階としての経済分析と綜合よりみでの歴史的諸現象に対する或る理由並に事由に基づく一考察」——米國に於ける経済史的追求又は、研究は一般的に西欧のそれであり、建國數百年そこそこの展開としては研究範圍も或る範圍に有限性を帯び、且つ反面、経済理論又は経済政策或いは經濟面においては、日本より進展せる諸因・諸要素の展開を示しているが、発展段階史的に見れば米國本来又は固有の特殊性は少なく、前者と比して遅れている様に思われる点少くない。即ち、あくまで西欧的繼承性に基因される展開である。日本、中国、印度諸國に比し、その展開的發展段階に比して劣れる点多々見られる。この点事例分析として、「武力原理としての古代より中世、特に封建制に到るまでの歴史的現象に対する経済史発展段階より見た原因分析」の一考察として述べた。

この場合、評価的批判又は総合的質疑応答時においては、決して「経済史」専攻学者又は研究者だけに限られたものでなかったと云う点が、深い印象を与えた。

彼等の研究又は考究においてはセクシヨナリズム的でなく、常に全体的又は総合的全般性に基因された質疑であり、考

究であったと云う事、即ち常に全体より見た部分性、又は部分的考察であり、分析であり、研究であった点に、深い感銘を受けた次第である。

経済史上における専門的経済史追求ではなく、「人文科学上（時には自然科学性も含めて）或いは広義的に述べれば全体的学問上よりみでの経済史として把握せんとし理解せんとし考究している点」である。

何かしら狭義又は主観的偏在性を含んだの考究・研究は極めて小範圍的追求に耽けつている主観的独善的傾向には一考を要する必要が促がされる。この意欲が帰國後更に強くなっていく点、否定出来ない心境に置かれている。これが現在の小生における課題であり、今後考へべき心懸であり、構想的基因として疑われない事実である。

——以上 一九八二、五、一三——

ヘレン・ハンフ「ブルー」

ムズベリ街の公爵夫人

Helene Hanff: The Duchess of Bloomsbury Street が大学用テキストとして出版（57年3月・開文社）。編註者は芳賀馨・引地岳雄・佐藤憲和。これはアメリカ人の著者が長年の夢・ロンドン滞在をはたした時の印象記・体験録で

あり、前作『チャリング・クロス街84番地』の続編となっている。

エリソン・キャロル

『ティチャー・ティチャー』

現代アメリカのテレビ・ドラマを大学用テキストに編集したもの。「生きた英語」のテキストとして最適。編註者は太田敬雄・嶋田裕司・K・エバンズ。

Ellison Carroll: Teacher, Teacher (57年3月・開文社)。

牡牛と鯨

西村清巳

R・ラドローは、リングイスティック・アクロス・カルチャーズの中で、文化比較の方法を論じ、「同じ形式で異なる意味を持つ場合」として、闘牛を例に上げている。スペイン系文化では、闘牛は、牡牛の耐力に対する人間の技巧の勝利を象徴するのに対し、アメリカ人にとって

は、武器を持った人間による無防備な動物の殺害に他ならないという。筆者も一度メキシコ・シティで闘牛を見たが、アメリカ人と同じ印象を受けた。何せ、始めから人間が勝つことに決まっているのである。

闘牛場に引き出された牛は、主役のマタドールとすぐに戦える訳ではない。牛に突かれても痛くも痒くもないように身を守った馬の上から、ピカドールが長い槍で突ついて「下符え」したあとで始めてマタドールの登場となる。

「メキシコに入らばメキシコ人に従え」という訳で、始めのうちは、周囲のメキシコ人の觀衆に調子を合わせて「オーレ」などと叫んでいた筆者も、その白けた気持ちちは、いかんともしがたかった。ほぼ正確に十五分毎に一頭ずつ牡牛が葬られていくのだから。

白鯨と壮絶な戦いをすすめた上、自らも海底に沈んで行ったエイハブ船長や、大カジキと三日にわたる孤獨な戦いをくり広げたサンチアゴ老人が文学で活躍するアメリカでは、闘牛は動物残酷物語以外の何ものでもない。

注意すべきは、いずれの文化にも、他文化からみれば、何らかの残酷な側面を持つているという点である。

現在、弘前大学にテネシー大学から留学中の女子学生は、日本に対する理解が極めて深く、その態度も多くの日本人学生よりも遥かに日本的である。そのヴィッキイ嬢、一度だけ激しい口調で日本を批判したことがある。鯨という、知能の高い哺乳動物を殺す日本人はヤバんだと色をなしていうのである。

「人間の生存はコミュニケーションにかかっている」(S・I・ハヤカワ)現

在、文化の比較の重要性はますます大き
い。
(弘前大学・JACC事務局長)

JACC行事記録

○第四回例会〔56・6・20(土)〕

於白銀学園専門学校

「フィリピンで心霊手術を体験して」と
題し、学園長長谷川安津子先生の講演を
聞いた。

○第三回大会理事会・総会〔56・6・
6(土)〕決議事項

1 役員改選

全役員留任に決定。なお、本人の意志
を確認し、新たに次の先生方を理事に推
薦した。

齋藤英二(桜の聖母短大) 新谷武四郎
(青森大学) 安田稔(青森中央短大)

早川正信(山形大学短期大学部) 藤原

廉作(東北女子大学)。顧問には新たに
今泉ヒナ子 関口富左の両学長先生が加
入。

2 学会名称の変更・会報名称の変更

東北比較文化学会はその名称を「日本
比較文化学会(JACC)」と改めら
れ、また、東北比較文化学会会報も「比
較文化会報」と改めることになった。

3 研究論文集の発行

「比較文化研究」と題し、学会誌を出版
しようということに決定。編集委員長に
芳賀馨先生内定。

4 決算報告承認される。

(出席理事) 花田・芳賀・宇野・太田・
佐藤(憲)・佐藤(幸)・小林

○福島支部十一月例会

〔56・11・21(土)〕 於郡山女子大学

1 挨拶 森 一

2 研究発表 司会 芳賀文子(郡山
女子大学)

○キノコにまつわる話(民族学・言葉
・祭式・方言等) 広井 勝(郡山女
子大学)

○食文化の伝承 山田幸二(郡山女
子大学)

3 談話会 「20年後の家庭生活と環境
変化を考える」 司会 森 一(福島医
大)

○福島支部七月例会

〔56・7・11(土)〕 於桜の聖母短期
大学

1 支部長挨拶および第3回大会報告

2 研究発表 司会 齋藤英二(桜の聖
母短大)

○食事回数とその時刻・今昔

小泉泰宏(桜の聖母短大)

○女性の人名と社会思潮

森 一(福島県立医科大学)

○社会科学における比較の方法につい
て——マックスウェーバーの型把握——

佐々木信夫(桜の聖母短大)

3 懇談会 司会 芳賀 馨(福島県立
医科大学)

○次期支部例会について

○TACC第四回大会について

○第四回日本比較文化学会 (JAC
C)案内

左記の通り、郡山会館にて開催され
る。

記

1 日時 57年6月5日(土) 9時より

2 場所 郡山会館

3 総会 9時30分

4 会長挨拶 弘前学院大学 山浦拓造

5 研究発表 10時~12時

司会 弘前大学医療短期大学部
西村清巳

○W・ワーズ・ワスの大学論 野辺地

工業高等学校 町屋昌明

○W・H・ハドソン・女性像の二面性

弘前学院大学 佐藤幸正

○「医学英和活用辞典」 福島県立医
科大学 引地岳雄

司会 大正大学 椎野止之

○日本におけるG・メレディスの受容
の一面 山形大学工業短期大学部 早

川正信

○津軽風絵と八戸風絵(南部風絵)の
比較 弘前大学 岩岡豊麻

司会 桜の聖母短期大学 森 淑

○キノコ民族学 郡山女子大学 広
井 勝

○中学校・米飯およびパン給食におけ
る牛乳の喫食状況の比較検討 郡山女子
大学 芳賀文子

○或る歴史現象(事象)に対する経済
史的分析と一考察 東北女子大学 藤
原廉作

6 講演 13時~14時

会津藩城の後——会津士族の生きざま——
郡山女子大学 高橋哲夫
前福島県文化センター館長

7 シンポジウム——人類の危機的諸相
と対応—— 14時10分~16時

司会 福島県立医科大学 森 一

司会 福島県立医科大学 芳賀 馨

○食料問題 郡山女子大学 山田幸二

○生命の科学的操作 郡山女子大学
和泉勝夫

○環境破壊 福島県立医科大学

森 一

○情報とコミュニケーション 桜の聖
母短期大学 齋藤英二

○国連大学の問題 弘前大学 花田隆

○宗教 郡山女子大学 須田秀幸

○精神文化 福島県立医科大学 芳賀

8 懇親会 17時~19時